

## 随想

### 名寄の昔、そして今のあれこれ

#### —明治生まれの偉人達を偲ぶ—その(4)

#### 元市長 石川義雄さんのこと

上川北部医師会会長 中 村 稔

石川義雄さんの生家は明治時代から大通り南5丁目(現在の日本生命ビル)にあった“丸石石川旅館”である。明治45年1月に発刊された御子柴五百彦の「名寄案内」には、「二階造白壁の丸石石川旅館は誠実勉強の評判」とあり、明治以降も多くの賓客が訪れたと言う。徳富蘇峰がそこで書いた書が島田要一さんの所に保存されていた。石川さんは旧名寄中学の1期生で名取さんと小学校同級生(名取さんは旧札幌1中から北大農学部)で天下の旧第1高校—東京帝国大学経済学部を卒業、政府機関に勤務されていたが、敗戦後、奥様の実家である土別の大野土建(株)の初代社長の要請によって取締役専務名寄支店長に就任されたと同っている。住宅は名寄信用金庫本店前にある一寸洒落たレンガ造りの建物である。

石川さんが学んだ東大経済学部の主流はマルクス経済学。トップは大内兵衛教授、一方の旗頭は古典派経済学を学びイギリス流の自由主義考河合栄次郎教授だった。戦前、「美濃部天皇機関説」で美濃部教授が軍部からの圧力で傷ついている時、敢然として抵抗したのは、大内教授ではなく河合教授だった。しかし、河合教授は昭和20年に急逝し生き残った大内教授は東大に君臨しやがて美濃部東京都知事選出の立役者になったのは歴史の皮肉と言わなければなるまい。歴史にifが許されるとすれば、生死が逆だったならば、日本の戦後の歴史は別の歩みだったのではないかと現在では言われている。

石川さんはマルクスを学び、その青春の想いは終生変わらず、戦後における名寄の労働運動を理論的に支えたのだと私は思っている。

私と石川さんの関わりは開業してからである。

夕方、時に犬を連れて散歩している“品格のある方だなあ”。その後にお話する様になり、(株)大野土建名寄支店長であり、旧名中1期であることがわかり、私も美深町出身で旧名中25期相当であることなどで親しくして頂いたのである。又、母方の祖父母が土別に住んでおり、祖父は旧松本工業で大野土建初代と同期、二人で土別にやって来たことをお話した。その後お会いしたときは、「あなたの伯父さんは家内と土別小学校の同級生だそうです」。なお、市長退任前から奥様は難病に罹り札幌の病院で加療されていたが、偶々名寄に帰られた時発熱されて往診を依頼され、坂田暉英先生に同道してもらい加療したが翌朝急逝されたのである。

そんな御縁があって昭和44年診療所の全面改築、住宅建築を大野土建にお願いした。私の住宅は古くなったが、あれでも旭川以北で鉄筋コンクリート造りの建物としては第1号だったのである。

やがて石川さんは市民に選出されて市長に就任され3期12年勤められたが、その道程は困難を極めた。もしかしたら大化けしたかも知れない“生葉公社”や“畜産基地”の借金、市立総合病院の内科医師不在などそのツケのため毎日走りまわり、自己の責任において多額の資産を個人として市に抛出されたのである。

市長退任後、或る会合で同席した時、咳がひどくマスクをしておられる。「石川さんカゼですか」「いや私は若い頃肺を患ってね。だから昔から体調維持のためテニスをやったのです。やはり年ですわ。」石川さんは名寄テニス協会長としてその基盤造り、大きな大会開催による市経済活性化につくされ、昭和44年度市文化賞、昭和63年には名

取忠雄さんと同時推挙で名誉市民の誉に浴されている。その祝賀会で請われて私の妻綾子が、祝舞“羽衣”をさせて頂いたのである。余言ながら綾子は能“一角仙人”のシテ方として、札幌能学会の会員としては初めて、平成元年度札幌市民芸術祭賞受賞の誉れに浴している。

話はそれだが、咳のひどい石川さんに、市立総合病院第一内科の赤石直之先生を受診することをすすめた。その後「やあ、行ってきましたよ。言葉に衣させぬ先生だったが名医と思います。有り難う御座居ました。」と。そして赤石先生は終生の主治医だったのである。

亡くなる2年前に散歩中に転倒され膝を強打されて往診を依頼されたり、その後腰を捻って殆ど毎日昼休み時間に往診した。その度に、お手伝さんに紅茶を入れさせながら1時間位お話する機会があった。石川さんは終生の読書人だった。一番驚いたのは、古い岩波の雑誌「思想」、「哲学」や理想社の哲学雑誌「理想」など若い頃読まれたのを自分で小冊子にして毎日読まれていた。カント、ヘーゲル、マルクスなどだった。「石川さんの青春の想いにマルクスですか。」「そうです。いろいろ読んだけど、一番心に残ったのはマルクスでしたね。先生の北大時代はどうでした。」「私はキルケゴール、マルクス、西田幾太郎です。ただ、一番初めに読んだのが西田の“善の研究”だったので今でも西田です。」「戦後の北大は随分学生

運動が盛んでしたが背景は何だったのですか。』

「やはり札幌は歴史が浅くて自由な街だったこと、一方的な極東裁判があり、占領軍が駐屯していた。だから北大では、マルキスト、心情マルキスト、私の様なノンポリでも、基本的には反米反帝でした。あの頃は今と違って学生には健全なナショナリズムがありました。その典型がイールズ教授排斥事件に連なった。全国でも初めてでしたね。簡単に日本の伝統を消されてたまるか、みたいでしたが。』

石川さんは己に厳しく、孤高の人だった。そんな中で終生読書をされ、ふと人恋しい時に私と若い頃のことと語りあったのだらうと思っている。

石川さんはさすが読書人。文章は美事なものだった。運動団体の記念誌に寄稿されたのを色々読んだが、私が会長を勤めるバトミントン協会30周年記念誌の寄稿文が最高である。その一節を引用する。「…この羽球といわれるバトミントン競技の中での球の姿は鞍上鞍下人も馬もなし、見る人の眼で追い切れぬ孤独の妙にふれ、テニスの球や卓球と全く異なる立体感を満喫させてくれます。はげしさとゆとりの調和の中で、人の知恵はこのバトミントン球にかかる技を捧げたのでした…。』

この文章にある「孤独の妙」を石川さんは終生愛されたのではなかったか、と改めて想うのである。

